

伴美喜子著

『マレーシア凜凜』

めこん、2002年5月

本書は、1991年からの約10年間、著者の伴さんがクアラルンプールで暮らした中で体験したことや考えたことをまとめたものである。職場や暮らしの話も出てくるが、異国マレーシアの生活臭漂う奮闘記の類とはまるで違っている。伴さんが出会ったものの1つ1つを題材に、マレーシアの魅力を爽やかに謳い上げた作品となっている。

本書の魅力はいろいろあるが、際立っているのが伴さんの観察眼の鋭さだ。例えば、多民族社会マレーシアを紹介するため、はじめに各民族・各宗教のお祭りを紹介している。ここまでは誰でも考えつきそうなことかもしれない。ところが注意深く読んでみると、どの民族の話にも多民族性がさりげなく顔を出していることに気づく。インド人の結婚式に行くと中国系やマレー系がいる。中秋節ではハラールの月餅が出回っている。しかも、学部長は中国系ムスリムだし、マレー系ムスリムの学生が実はサバ出身のカダザン人だったりする。

では、そんな伴さんが本書で教えてくれるマレーシアの魅力とはいったい何なのか。伴さんは、それを同僚のエドワードさんの言葉を借りて伝えている。マレーシアのどんなところに誇りを感じているかという質問に、エドワードさんは「Visionがあるということ」と答える。伴さんが「Vision 2020」のことかと問い返すと、答えは「みんながそれぞれに Vision を持っている。これが一番誇れることだ」だった。確かにそうだ。みんなが Vision を持っている。しかも、それぞれの Vision を持っている。これがマレーシア

の誇りだし、マレーシアの魅力でもある。

エドワードさんは最後にもう一度登場する。マレーシアを去るにあたってエドワードさんと再会した伴さんは、本書で紹介する「Sejahtera Malaysia」をどう訳せばいいかエドワードさんに相談する。「sejahtera」を「平和」と訳すのではどうも不十分だ。そう言う伴さんに、エドワードさんは「それはね、Sacrifice だよ」と答える。異なる民族がともに暮らしていく上では、自己犠牲の精神が必要だということなのだろう。辞書には載っていないけれども、その方が現実的で正しい訳のように思えてくる。

エドワードさんは何者なのだろうか。こんなに理想的なマレーシア人であるエドワードさんは、実は伴さんの「分身」なのかもしれないと思う。伴さんの中には、マレーシア人以上にマレーシアの魅力を知り尽くしている伴さんの「分身」がいる。それが時にエドワードさんとなり、伴さんにマレーシアの魅力を語る。伴さんは、聞き役になることでマレーシアの魅力を引き出し、それを描いていく。そうして生まれたのが本書であるような気がしてならない。

内容をほとんど紹介しないまま紙幅が尽きてしまった。紹介できなかった部分はぜひ実際に読んでいただきたいと言うほかないが、マレーシアの魅力を再確認したい人にも、自分に関わっているマレーシアがどんなところか周りの人に知ってもらいたい人にも、本書はきっと満足を与えるはずである。

(山本博之／東京大学)